

(ヒトを対象とする医学系研究に関する倫理指針に則る情報公開)

研究協力をお願い

このたび以下の研究を実施いたします。本研究への協力を望まれない場合は、問い合わせ窓口へご連絡ください。研究に協力されない場合でも不利益な扱いを受けることは一切ございません。

本研究の研究計画書及び研究の方法に関する資料の入手又は閲覧をご希望の場合や個人情報の開示や個人情報の利用目的についての通知をご希望の場合も問い合わせ窓口にご照会ください。なお、他の研究参加者の個人情報や研究者の知的財産の保護などの理由により、ご対応・ご回答ができない場合がありますので、予めご了承ください。

【研究計画名】 精神疾患の分子生物学的・分子遺伝学的研究

【研究責任者】 高尾昌樹(国立精神・神経医療研究センター病院 臨床検査部)

(2020年4月より、研究責任者が齊藤祐子から高尾昌樹に変更になりました。)

【本研究の目的及び意義】

・目的

統合失調症患者様の剖検例の脳において、ゲノムDNA、RNA、タンパク質、アミノ酸等の分子を解析し、気分障害、不安障害をはじめとする統合失調症以外の精神疾患の患者さんと精神神経疾患のない健常者の方々を比較検討することによって、違いがあるかどうかを明らかにし、統合失調症に特異的に生ずる脳の障害の分子メカニズムを見いだすことを目的としています。

・研究の意義

統合失調症は、地域や文化に関係なく、およそ100人に1人の割合(約0.8%とされています)で発症する頻度の高い精神疾患です。ほとんどが15歳から35歳までの人生の早期に発症し、慢性化しやすく、社会的な機能が完全に回復する患者様は20%に満たないという研究結果が報告されています。これは、現在の治療薬が、幻覚・妄想などの陽性症状(病気になると新たに現れるという意味です)を改善するのに対して、感情の自然な表出が難しい、意欲が出ない、会話や思考が豊かではなくなる等の陰性症状(病気になると減弱したり消失したように見えるという意味です)や、状況を的確に把握して適切な行動を遂行することが苦手になる認知機能障害には、効果を示さないためです。したがって、症状の原因、慢性化、進行等に関係する、脳で働く分子の異常を解明し、これらを修復する方法を見いだすことが、急務になっています。

いずれの症状も、思考、感情、行動等の精神機能を発揮し調節する神経系がバランス良く働くことができなくなっていると考えられ、私たちは、ドーパミン、グルタミン酸等の神経間のコミュニケーションを支える分子や、それをプログラムするゲノム遺伝子の障害が基盤にあることを示す研究結果を得てきました。そこで、これらの所見をもとに、さらに新しい研究手法を取り入れ、提供していただいた死後脳組織で、様々な症状を引き起こしている分子メカニズムを明らかにし、現在の治療薬が奏功しない症状に対する治療法の手がかりを得ることを目指した研究を進めます。

【本研究の実施方法及び参加いただく期間】

対象となる方

2010年4月1日以降、2014年までの間に、国立精神・神経医療研究センター病院 ブレインバンクでご遺族が患者さんの死後脳(剖検脳)の研究使用に関して同意し、ブレインバンクに提供された方のうち、統合失調症、双極性障害、不安障害、そのほかの精神疾患と診断された方々。

利用する試料・情報等

試料：剖検脳組織

情報等：診療録（年齢、性別、診断名、脳画像検査の検査結果など）

研究期間

2020年6月23日から2024年3月31日まで

【共同研究機関】

共同研究機関：昭和大学・医学部薬理学講座・薬理科学研究センター医科薬理学部門

研究責任者 木内 祐二（研究代表者）

既存試料・情報の提供のみを行う機関：Victoria Brain Bank (Australia)

○問い合わせ窓口

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター

所属 国立精神・神経医療研究センター病院 臨床検査部 氏名 高尾昌樹

電話番号 042-341-2712 (7285)

○苦情窓口

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター倫理委員会事務局

e-mail : ml_rinrijimu※ncnp. go. jp（「※」を「@」に変更ください。）